

宗教・修養団体におけるネットワーク

——信仰治療の仕組み——

小野 泰博*

波のメタファー

音にきく高師の浜のあだ波は

かけじや袖のぬれもこそすれ（祐子内親王）

人口に膾炙している歌である。ここでいうあだ波は、仇情けのことをいう。「秋波」（ウイंक）をおくるという表現もある。また人生の「荒波」ともいい、「寄る歳波」ともいう。元来自然現象をさす「波」ということばは、肉眼では特定できない現象にも広く適用されてゆく。寒波の到来もよく知られている。光波、電波、脳波など派生した科学用語も多い。限られた用語を新しい事象の説明に使うとき、メタファーが生じてくる。

しかし、宗教の方でもこうしたメタファーには事欠かない。「靈波」、「靈動」ということばがある。また超心理学には「念波」という用語もある。靈波ということばは、やがて実証的に研究が進み、電波と同様科学的な用語に組み入れられる日がくるのであろうか。かつてドイツのフェヒネルが使い出し、一時は流行し、わが国でも大学のカリキュラムにまでなった「精神物理学」（psycho-

* 図書館情報大学教授・宗教学

physics) という用語は学術用語からは消え去ってしまった。その命名にふさわしい内容が実現しなかったためであろう。

また、よく知られているフロイドのリビドー (libido) なる用語は、1895年頃から性的本能のエネルギーをあらわすことばとして使用されているが、ユングではこれが生命エネルギーの意になり、W. ライヒは、これを、実際は、師のフロイドは試験管にとりうる科学科学的物質的なものであると想定していたのだとして、自分ではオルゴン・ボックスに採取できるオルゴン・エネルギーの名で呼んだ。リビドーもやはり、また純然たる科学用語とは言い難い。

果して「霊波」という宗教にポピュラーなこのメタファー用語は、詩的表現で終るのか、それとも科学的用語におさまるものであろうか。

あるいは、メスメル動物磁気 (animal magnetism) のように、それ自体としては実証されなかったが、メスメルの名をとったメスメリズム (催眠術) の名において、その働きの意味するものが残されている。

霊波・霊動と治療行為

新原町田市では「ヨーガ健康法」の道場があり、そこでは七十を過ぎた老婆 (故人) が、戦時中インドネシアで習いおぼえてきたという健康法を助手の娘と実践していた。手足の麻痺、足腰の痛み、慢性の胃腸病を訴える人々が治療に訪れる。患部に対して植物油を塗り、その上をギザギザのある貨幣をガーゼにつつんでマッサージをするのである。これだけでも血行をよくする物理療法の効果は十分である。

しかし療法はこれだけではない。患者さんたちはあお向け何人か並んで川の字形に寝る。この老婆は、これら患者さんの列の前に立ち、おもむろに両の手を掌を外に開いて、額の前に円形にかざす。患者さんたちは、このおばあさんの手の掌から、自分たちの体内に刻一刻、霊波が流れ込んでくるのを感じる。一人二人身体を上下に振動させるものが出てくる。時にはピョコピョコと兎のように大きく跳びあがる人もある。つまり霊波による霊動である。かつてメス

メルの行なった集団治療法がここでは加味されている。この全身ケイレン的な発作運動が治療効果にプラスしているようである。

ここへ来る人たちは自分たちのことを治療同朋と呼び、持ち寄った食べ物を一緒に煮炊きして分けあって食べる入院風景がある。治療者への深い信頼感が、すなおに靈動をうけいれることになる。かつて精神科病棟で、E. Kという電気ショックをうけにくると気持がよくなると話していた者の治療法を思い起こす。

急性のインカーネーション

宗教的信仰の面白さ、と言ってはいけない、不思議さは、有限と無限、死すべきものと不死なるもの、時間と永遠といったようなものが、いわばメタファーの世界でしかつながらないものが、つながってしまう世界であるからともいえよう。インカーネーション (incarnation) ということばは、普通ラテン語の in と caro (flesh, 肉) との合成語として、キリスト教の方では「受肉」という訳がもっともよく知られている。つまり神がイエス・キリストという人格となって、つまり人間の姿でこの地上にあらわれてこられたという意味となり、いわば神性 (divinity) と人間性 (humanity) 両者間の結びつき (union) をここに見出すことになる。神が人になるのである。明治16年の『哲学字彙』というわが国最初の哲学辞典ではこの語に「降生」の訳がついている。神が地上に降りてきて人間として生まれられる意味であろうか。うまい訳ともいえよう。とにかくこの考え方を受け容れぬ限り、キリスト教の十字架も意味をなさぬ。しかしこのインカーネーションをもっと広い意味にとって、靈魂、精霊、神性なものといった非物質的なもの (nonphysical entity) が、人、動物、植物などといった物質的なもの (physical body) になる行為、状態とも解することができる。こんなところから日本語でいう化身、権化、権現の意味もインカーネーションの訳語となる。

さきの靈動は、目に見えない宇宙の大靈 (over-soul, エマーソンの用語)

のようなものが靈波となって、このおばあさん治療者の自体の中に集約的に集まってきて、それが、彼女の掌を通して各目に分与されてゆくと、それが眼に見える物理的、身体的運動となってあらわれるとみる。

いわば靈動は、一時的な、急性の (acute) インカーネーションとすることもできる。何のことはない、日本では昔からよく知られている「神がかり」の動作の一部ともいえる。神がかりになるとさらに自動的な発語 (glossolalia, 舌がたり) も始まる。つまり軽い靈動も、憑依現象 (possession) もインカーネーションの一部と見ることができる。哲学的にはストア派の唯物論的汎神論 (materialistic pantheism) がこれにあたる。つまりプノイマ (靈魂) というものが宇宙にゆきわたっていて、それが人体の「形相」として「質料」である地水火風という四元素の集まりを素材として、人間ができると考える。中国の「気」にもプノイマ的な性質がある。ポリネシア人の マナ (mana) にも似ている。

くだいて言うと、死すべきものである人間に、不死たるもの (immortality) の一部である靈波が流れ込んで、弱っている人体に活気を与えてくれると解することができる。ここには「宇宙全体の共感」 (sympathy of whole) という考えがある。

「靈波之光」

千葉県野田市にある「靈波之光教団」の教祖さまこと、長谷善雄氏は、御守護神さまと呼ばれている。常磐線金町在の同級生や顔なじみの人々は「善ちゃん」と呼ぶ。教祖が長い間四国をはじめ各地の靈山で、山伏様の修行をして帰ってきた当座は、その靈能がかわれて「よく当たる先生」として、たのまれれば自転車で気軽に近隣の人に「失せ物」や各種の占いに応じていた。それがいつの間にか、ファンが信者となり、信者組織も 200 人を越えた頃、先生のために松戸に家も建てられ、大宇宙神の御分神として、罪と因縁によって苦しむ人々をその神通力 (靈波) によって人々を救って下さる御守護神さまと呼ばれる

生き神さまになってしまった。

宇宙の大生命力が長谷善雄に「受肉」したのである。そしてこの受肉した生き神は、宇宙の大生命を信者に無限供給できる力を分与されたことになる。いわば一種の超能力をそなえたスーパーマン（超人）になり、神通力を発揮できるのである。わが国はこうした形の霊能者を多く出現させてきた。

野田の本部に参詣した人は、帰りには大勢の人が左手に白い包帯をした姿で門を出て来る。こんな大勢のけが人が人が治療のため訪れるのかしらとみていたら、これはいろんな事情で当本部まで来られない人のため、代理人が、教祖さまからじきじきにお授けいただいた御神水をわが手にうけて、その大事な手を外気にさらさず、汚さないようにして持ちかえり、家で待っている者のために、霊波の乗り移った御神水の効果を手づから伝えるためのものだという（御神水を瓶に入れて帰ってもよいだろうに思ったが）。

東秩父村では、部落を代表して木曾の御岳さんに参詣してきた人は、御岳さんの池にひたして乾かした御札を持ち帰るが、そのお札はこまかく切り刻んで水に入れて飲むことになっている。御神水（御霊水）の効果は色々に工夫される。

呪術とサクラメント

呪術とサクラメントは隣り合わせにある。昔東大病院の偉い先生の述懐に、ある老婆の患者に処方箋を出してあげ、この薬を飲みなさいと指示したところ、そのおばさんは先生のいった意味を誤解して、その処方箋をさきの御岳さんのお札と同じに持ち帰り、切って細かくして飲んでしまい、あとであればよく効く薬でしたと感謝したという話が伝わっている。東大病院という権威、カリスマがそのおばさんの頭の中にはあったのである。その神から与えられたもの、すなわちカリスマの権威が病気を治したのである。プラセボ効果（偽薬）の効果もよく知られていることである。

呪術には一般に二つが考えられている。それは感染呪術と類感呪術と呼ばれ

る。前者は一度接触していたものは、切り離されても、もとのものと同じ効果をもつものである。つまり呪い殺したい相手の身体から切り離された髪の毛や爪に危害を加えることによって、その髪の毛の主にも呪いが及ぶという考えである。後者はよく知られている呪いの藁人形のように、似ている代用品をやっつけることによって当人が傷つき、たおれるという連想である。前者を、人類学者のリーチは、ミトノミー（metonymy 換喩）の世界、後者をメタファー（metaphor, 陰喩）の世界とに分けている。日常の言語表現の世界の中で果す比喩表現のもつ意味を呪術の世界にあてはめたものである。

換喩では、王冠は王権そのものを表わすし、ボトルは容れものをさすが、ひいては酒そのものも表わす。さて、御神水は、実際の水薬に似ている点ではメタファーであるが、神の化身である御守護神さまの手から授かるとなるとミトノミーの要素もある。

キリスト教の sacrament の儀式では、パンとぶどう酒が、イエス・キリストの肉と血に変質するのである。これを信じないことにはミサの儀式はなり立たない。Sacrament (sacrament) の意味は「聖別されるもの」あるいは「神聖なもの」(something consecrated, or holy) をさす。人間の営む儀式儀礼は、今風に言えば「モノ」に付加価値としての聖なる情報価値をも与え得る。単なる男女の結合も、人間だけが結婚式とセレモニーを通すことによって、いささかでも聖化させることを行なってきた。神の前で両人が誓うことによって、その契りがかりそめのものではなく、恰も永遠のものであるかのように。

世にいう「丸山ワクチン」なる特効薬は、果して薬物としての効果だけが働いているのであろうか。丸山先生はいわれる。「これだけ多くの人がこの薬で治ったとって感謝して下さっている。また副作用もない。どうして薬学会、医学会は正式の薬品として認めてくれないのであろうか」と。

新宗教の教祖はいう。病院で治してもらえなかった患者さんが、信仰の力でこんなに治ったと感謝して下さっている。しかし丸山ワクチンの場合も、新宗教の場合も、治らなかつた方の人の声は忘れられているのではないだろうか。丸山ワクチンについては、十分な動物実験が済んでないといわれる。しかし人

間は動物と全て同じではない。人間にはカリスマを信じてしまう効果がある。副作用がないという点では、浄らかな水（御神水）についてもあてはまる。エイズの特効薬も世界には出廻っているといわれる。ひょっとしたら効くかも知れないという「希望」は、どんなものにも付加価値をつけてゆく。また「希望」には代価はあってない。美術品や骨董品に値があってないのと同様である。宗教団体で生命をとりとめた人の感謝の思いには際限がない。お金が集ってくる。

御 浄 霊

同じく霊波的な考えに基づく信仰治療を実践してきた教団に世界救世教がある。教祖の故岡田茂吉氏自筆の「光明」,「大光明」といった文字を縮小して印刷したペンダントを信者たちは肌身につけている。病める人の正面ないし背後に坐して、右手の掌を外にしてかざすのを御浄霊と称している。形・動作としてはごく簡単な所作であるが、意味づけが行われると別の働きをすることになる。教祖が直接患者の身体にふれる形の浄霊を行っていた時期もある。かつて岡田教祖が師と仰いだことのある大本教の出口王仁三郎は、しゃくを手にしていたが、教祖は扇を使い、「世界を救うこの扇、観音力」と書いて、これで触れることもあった。教祖は「自観」という号をもつようになる。これは、教祖の生れ育った浅草観音の雰囲気からして、自分は観音さまの化身、分身ではないかという自覚を抱くとともに、自観師は自分の腹中には直径二寸の珠があり、その珠は観世音菩薩自身のもっておられる如意宝珠にあたり、そこから観音力、つまり神霊放射能が絶えず放射されていると信じた。つまり、この腹中の珠の霊線により無数の光素が放射され、その光素は光の極微分子で強力な殺菌力ありと説明していた時代がある。病気は人間霊体の曇りにあり、その曇りの解消が病気治療の唯一の条件となる。その曇りというのは、たとえば眼病は他人の眼をごまかす罪から出、耳の痛みや舌の病は、耳に痛いような言葉使いをしたことの罪、心がけの不純によると解する。

またここでは、人間を構成する要素を、霊と肉体とに分け、前者を火素、後者を水素と呼び、霊界の浄化によってこの火素が増大し体界に影響を及ぼすものと見る。しかもこの浄化は、個人的には心がけ、善行の積み重ねという倫理的なものになる。そして病気と称するものは、知らず知らずに霊界に汚穢が堆積しており、それを排除するための自然浄化作用が必要で、それが病気という形をとると解する。この霊の曇りは、一方では自らの善行による努力にまつとともに、他方、天地創造の主神大光明真神（みろくおおかみさま、先の観音菩薩はその変化身）の霊光に縋って解消できるものという。よって、光明と書き記されたペンダントを通して、宇宙生命のエネルギーが自分の手から他人の身体へ伝わり、火素（霊力）の増大につながるという意味づけがなされる。初期の頃は、一つ一つの病気について、その病因と浄霊期間が処方・指示されていた。たとえば胃潰瘍の場合、その〔原因〕は、大部分消化薬の連続服用のためであって、そのため胃壁をも柔軟になり、その固結物がふれると破れて出血し、痛みを伴う。〔浄霊〕とは消化薬を中止し、胃を背面より浄霊すること。〔期間〕とは、軽症で一か月、重症で三か月、なお胃の浄化とはすべて背面より行うものとする。『浄霊の葉』というのはパンフレットで、教団も初めのころは、特に薬毒の害を強調するとともに、自らの治療を神霊医学の名で呼んでいた。この「葉」には近代医学の批判と強い自負が表現されていた。

お手当て

やけどをしたとき、自分の手がただちにその箇所動いていくように、あるいは病める人の側に立つとき、まずはその痛む箇所に手を触れようとするなど、「お手当て」はごく自然な人間のいとなみであった。また近年流行のケア（care）の語こそ治療（cure）の語源であることが忘れられている。看護婦がcareし、医者がcureするのではなく、共にケアだったはずである。床屋あがりの外科医、フランソワーズ・パレの「われは包帯するのみ、神これを癒し給う」という表現はいまも意味をもっている。それは神ということばが嫌いなら

宇宙の大生命でも何でもよい。人間以外のもっとも大きな力の援用を説明する概念の助けが、打ちひしがれた病弱者に生きる勇気を与え、活力を賦活してくれるからである。

仏教では、三つの治療法をいう。接手と光照と慈念である。接手とは、まさにお手当てそのものをさし、患者に救いの手をさしのべることである。光照とは、薬師如来像にみられるように、左手を膝に、右手を揃えて指を開いて自分の肩のあたりにかかげ、掌を外に向ける姿で、抜苦与楽の印相といわれる。また施無畏（何も恐れ、こわがることはありませんよ）の印相とも称せられる。薬師如来は時に左手に薬びんを持っておられる。この施無畏印がかの浄霊の形に似ている。また第三番目の「慈念」といわれるのは、慈悲の心をもって、どうぞ治りますようにと遠くにいる病人に念波を送ることとある。祈念の徳なのであろうか。検査機器と薬物にとりかこまれた今日の治療場面であって、時にお手当の原点をふりかえてみるのも無駄ではあるまい。

即決のおすがり

聖書によると、イエスの場合は、自分の方から病人に触れられるよりは、病人どもがイエスの身体にふれたいととりすがった場面が多いように思われる。

ルカによる福音書（6：18～19）には、「教えを聞こうとし、また病気をなおしてもらおうとしてそこにきていた。そして汚れた霊に悩まされている者たちもいやされた。また群衆はイエスにさわろうと努めた。それは力がイエスの内から出て、みんなの者を次々にいやしたからである」とある（ここでは病魔にあたる汚れた霊が想定されている）。また、マルコによる福音書（6：56）では、「そして村でも町でも部落でもイエスがいって行かれる所では、病人たちをその広場におき、せめてその上着にでもさわっていただきたいとお願いした。そしてさわったものは皆いやされた」とある。

北九州にある善隣会という宗教団体では、「心身相関神性開発人間ドック」なる五日間位の集団研習会を行なっている。これには上記聖書のような、おす



写真1

がりの現代版といったものがみられる。その研修内容は講義，座談，お祈りのあとで，三日目の正午に，それまで一度も顔を見せない教主が初めてあらわれる仕組みになっている。前座をうけもつ講師は「運命の開拓は可能である。心は運命の製造者であり，生活は運命の製造所なり」と説き，「いまわれわれは心の赴くまま無軌道な生活を営んでいる。そして相互に反目し憎しみ合っている。今ここで心の改善，修理修正を即決即断で実行しなければならない」と，心の入れかえ，立てかえを迫ってくる。

ついで講座方式の小グループの座談により先輩教師や体験者による実践報告や病気の治癒体験がつぶさに語られる（写真1）。先輩に促されて新参者は自己の悩みを告白する。このあと，運命の道理を求めて求道苦行二十年を積んだ教祖の具体的な紹介として，そのとき用いられた衣類や金剛杖，頭陀袋などが聖遺物さながらに披露され，その遺徳から神が教祖として出現されたと説く。そして苦悩者の重荷を自らの肩で荷われることを誓われたいさおしが語られ，衣鉢をついだ現教主にも，その肩代り，身代りの任あることが知らされる。

こうした前段階の準備ととのったところで教主のお出ましとなる。教主は黒の衣袋に身をつつみ，「人間自分で生きている思うは間違いなり。生かされている思うがまことなり。……晴れ曇りは雲のわざにして，いつも変らぬ陽の光かな」の心構えを説き，覚悟の即決即断を迫る。信者たちは一斎に左手を腰に右手を空にかかげて，「やります，やります，やります」を三唱する。このあ



写真 2

と教主は壇上からおりて信者たちの間に「わりこむ」。この時、信者はわれもわれもと教主の身体にとすがり、「おすがり」しようとする。教主も汗だく、時には下着のシャツまで引きちぎられる（写真2）。

この集団的熱気のあとが、今までビッコを引いていた人がすっと歩きだし、あるいは補聴器をかけていた人が、聞こえるようになりましたと補聴器をはずす場面が展開する。その即決で治癒した人が壇上に並ばされる。心因性の障害はこのショッキングな演出で治る場合が多い。奇妙な雰囲気である。

現代の医学は病気の処方はしてくれるが、明日からの生き方についてまで処方はない。見えない力の加護を動因させる方法としての宗教的なストーリーは、それなりに意味がある。
